唐沢家の四本の百合

小池真理子

唐沢家の四本の百合

小池真理子

唐沢家の四本の百合

一九九一年八月二八日初版印刷
一九九一年九月七日初版発行

著者　小池真理子
発行者　嶋中鵬二
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替 東京二-三四

印刷所　三晃印刷
製本所　矢嶋製本

Published in Japan © 1991 CHUOKORON-SHA, INC.
Mariko KOIKE
ISBN4-12-002035-5

唐沢家の四本の百合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

序章

唐沢家の別荘は、通称〝百合ヶ原〟と呼ばれる信州の小さな高原地帯にあった。かつてその付近一帯の丘は、山百合の花で埋め尽くされていたそうで、そのために〝百合ヶ原〟と呼ばれるようになったという。

丘という丘、草原という草原が、淡い黄色に見える山百合の花で埋もれていた……そんな遠い夏の日の記憶を語ってくれたのは義父だ。

「風が吹く日はね」と義父は、特徴のあるあの低く野太い声で言ったものだ。「真っ青な空が一瞬、オレンジ色に染まるんだ。どうしてだと思う？　花粉だよ。山百合の花粉が一斉に舞いあがるからなんだよ。すごいだろう」

そんな日には、別荘の中も山百合の甘ったるい香りで満たされた、という。どの部屋に行っても同じ香り、同じ甘さが漂い、あふれ、しまいには衣服や髪の毛にも山百合の香りがしみこんで、息苦しくなるほどだったという。

だが、時を経るごとに山百合の数は減っていった。別荘開発業者が次から次へと山を切り崩し、伐採した木々を運ぶために、新たな道を作ったりしたためだ。

私が唐沢家に嫁いだのは十二年前のことになる。別荘に滞在すると、義父は、私と二人きりで散歩に行ったり、街に買物に行ったりするのが好きだった。恋人気取りだった、と言ってもいい。そして、散歩に出るたびに、義父は私を近くの丘に連れて行き、山百合の花が減ったことを嘆いた。道すがら、山百合を見つけて、一本、二本……と子供のように数えあげてみせるのも義父の癖だった。

表向き、そんな義父に調子を合わせて、山百合を見つけるのを楽しみにしているふりをしていたが、正直なところ、私は山百合の花はあまり好きではなかった。山百合に限らない。ユリ科に属する花は、私にとって、どこか怖い花、得体の知れない花だった。

嫁いで間もなく、一人で散歩に出て、仄暗い雑木林の中で突然、巨大な美しい山百合の花と出会った時の、あの戦慄は忘れることができない。

夕暮れの、すでに日が傾きかけた林の中で、私は自分の背丈ほどもある一本の山百合の前に立ちすくみ、息を止めた。獰猛にそり返った白い花弁には朱色の斑点がついており、突き出したおしべの先からこぼれ落ちる花粉は毒々しかった。まだ開かないつぼみの部分ですら、孤独な大蛇の鎌首のように、どこか凶暴に見えた。

花に表情があるとしたら、山百合にはその表情と呼べるものは一切感じられない。能面のよう

な無表情さで、山百合は出会い頭に人を驚かせてみせる。あでやかな色彩の蔭には、冷笑がある。孤独がある。見る者の神経を逆撫でするような閉鎖性がある。

私は自分でも説明しがたい恐怖にかられ、すぐさま雑木林から逃げ帰った。別荘に戻って夫にその話をすると、夫は大声で笑った。笑いながら、「そんなに山百合が怖かったら、この家に住めないじゃないか」と言った。「ここは山百合屋敷みたいなもんなんだよ」

夫の言うことはあたっていた。唐沢家の別荘の庭には、山百合の群生が見られた。広大な千坪ほどもある敷地に、もともと自生していた山百合をまとめて植え替え、窓から見えるようにしたのは義父だった。それだけではない。義父は山百合を気にいるあまり、東京の親しくしている業者に頼みこんで、特別に山百合を促成栽培させていた。季節を問わず、唐沢の家に山百合が飾られていないことはなかったのだ。

私は不器用に笑い、「この家の山百合はいいの」と言った。「でも、山の中で突然出会うのはいやだわ。なんだか怖いもの」

へえ、と夫は言った。「あんなの、ただの花じゃないか」

夫は何故、私が山百合を怖いと思うのか、わからなかったに違いない。私もそれ以上は説明できなかった。

今はもう、夏になっても雑木林の中でひょいと山百合と出会い、子供じみた恐怖に震えあがることもなくなった。唐沢家の別荘の周囲には、東京の業者が建てたログハウスふうの小さな別荘

が建ち並び、時折、目にすることのできた山百合の群生も、それらのちまちまとした家の下に埋もれてしまったからだ。

今、百合ヶ原で山百合の花を見ることができるのは、唐沢家の別荘の庭だけである。庭には相変わらず、夏になると大量の山百合の花が咲く。冬に別荘に来る時は、義父は東京で栽培させた山百合を切り花にし、別荘まで運んで、居間に飾ることもあった。

白い大きな陶器の花瓶に生けられた山百合は、四六時中、これみよがしに床にオレンジ色の花粉をばらまいた。間違えて指先や衣服に花粉をつけると、いくら洗ってもなかなかおちなかった。私を含め、唐沢家の三人の息子にそれぞれ嫁いだ三人の嫁たちは、義父のいないところで山百合に悪態をついた。実際、床やクッションにこぼれ落ちる百合の花粉のせいで、掃除や洗濯にはひどく手間がかかったのである。

だが、私たちは義父が好きなものはたいてい受け入れるつもりだった。義父はドンファンのごとき遊び人で、時として目茶苦茶な女遊びを繰り返したが、素顔は実に魅力的な愛すべき人物だった。たとえ義父が室内に巨大な樅(もみ)の木を植えよう、と言い出しても、私たちはそれに従っていただろう。

そう。誰も彼もが、義父に一目おき、義父を愛し、義父がやることを認めようとしていた。義父がそこにいるだけで、唐沢家は明るい笑い声で包まれた。同じ家に嫁いできた三人の女……それぞれに個性的で、互いにそれまでは縁もゆかりもなかった三人の女が、急速に親しくなり、世

界中で一番の親友同士のようにふるまえるようになったのも、ものごとにこだわらない、天衣無縫な義父のおかげであると言ってよかった。

義父は私たち三人の嫁と、一人の娘を平等に愛し、自分の寝室と書斎には常に、美しく咲いた四本の山百合を飾っていた。「僕には四人の愛人がいる」と冗談を言いながら、自室に四本の山百合を飾り、それぞれに私たちの名前をつけ、いとおしそうに撫でたり、呼びかけたりするのが義父の習慣だった。

また、私たちの誕生日には義父は必ず花束を贈ってくれた。花束にはいつもカードが添えられており、そこにはいつも「愛しているよ」と書かれてあった。

愛しているよ……初老の男が嫁たちに向かってそう書くのだ。奇をてらって書くのではない。あたりまえのことのように大真面目にそう書くのだ。

私たち家族は義父を中心にして、手をつなぎ合い、満ち足りた幸福な家族ごっこ……ままごとをやっていたに過ぎない。その間、唐沢家にはいろいろな出来事があった。私自身、死んでしまいたいと思われるような悲しいこともあった。

だがその遊び、そのままごとは、信じられないほど楽しいものだった。私は長い間、唐沢家に嫁いだことを誇りに思い、同時にわが身の幸せを噛みしめていた。三年前のあのおぞましい事故で夫を失ってからも、私は唐沢家を去ることなど一度も考えなかった。

私は、自分が、義父が欠かさずに飾っていた四本の山百合のうちの一本であることを忘れたこ

とがなかった。それは馬鹿げた子供じみた空想に過ぎなかったのかもしれない。だが、義父の書斎や寝室に、まるで私たち自身であるかのような四本の山百合が見事に咲き誇っているのを見るたびに、私は静かな幸福に満たされた。涙ぐんでしまうことすらあった。

幸福という感覚が、疑うことを知らないおめでたい人間の陥る罠であるとしたら、文字通り、私はあの頃ずっと幸福な罠の中で憩っていた。あの幸福が単なるままごとの幸福であり、ふざけた大人の遊びだったと気づかなかったら、私はずっと幸福な罠の中でにこにこ笑っていられただろう。

そうなったら、どんなによかったろう、と思う。毎日、山百合の花粉で汚れた床に掃除機をかけ、どこかのセクシーな愛人に会いにめかしこんで出かけて行く義父を見送り、他の二人の嫁たちと長い午後をおしゃべりに費やし、足の不自由な義妹の世話をしながら、私は確実に幸福に年をとっていけたはずなのだ。確実に。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

義父、唐沢慎介は輸入家具専門店である唐沢商会の三代目社長だった。唐沢商会はもとはと言えば、明治時代中期にヨーロッパの小物家具を売る店として名をあげた、歴史の古い家具店である。慎介の代になってからは、それまで日本橋にあった店舗を麻布に建てたビルに移した。都内に三ヶ所のショールームを設置したのも慎介である。そのうちの一ヶ所、銀座ショールームの地下に、慎介は唐沢商会直営の高級フランス料理店を開店させ、その店は芸能人や文化人たちが集まる店として評判になった。

扱っている商品はソファー、ダイニングテーブル、各種チェストなど一般的なものだけでなく、システムキッチンや小物、輸入ファブリックに至るまで、あらゆる分野に及んだ。値段は驚くほど高いのだが、売上げは常に安定しており、まさに順風満帆の経営状態であった。

慎介と妻の育代との間には三人の息子がいた。長男の慎一、次男の慎次、三男の慎三である。

十二年前、二十六歳だった私が長男の慎一と結婚した翌年、育代は病死した。癌だった。義父

が二度目の結婚をするのは、それから六年近くたってからのことになる。
育代が早く亡くなったせいで、私はいわゆる〝姑〟との間でおこる争いには無縁でいられた。育代という人は、どちらかと言うと慎ましやかな感じのする目立たない女性で、夫に従いながら生きることを仕事にしていたような人だったが、反面、他人に決して自分の本当の姿を見せまいとする頑固なまでもの気取り屋でもあった。
自尊心の高さがそうさせるのか、どんな人と同席していても、口数が少なく、積極的に会話に参加しようとしない。いつもぽつんと離れたところにいて、曖昧なまなざしを宙に漂わせる。それは、遠くから人々を眺め、生欠伸(なまあくび)を噛みころす、血統のいい気位の高い猫を連想させた。
自意識が過剰な、ひねくれた目立ちたがり屋だったとも言えるが、もしも育代が生きていたら、私は長男の嫁として、古くさい女の序列に加わり、いやというほど苦い思いをさせられたことと思う。
次男の慎次が勢津子と結婚したのが十年前。三男の慎三が夏美と結婚したのが八年前である。
末っ子の慎三が結婚するまで、私たち夫婦は義父や慎次夫妻と共に母屋に住んでいた。大学在学中から家を出て、気ままな一人暮らしを続けていた慎三がいよいよ妻を迎えると聞いた翌日、義父は早速、親しい設計士を呼んだ。自宅敷地内に慎次夫妻と慎三夫妻が共に生活できる大きな二世帯住宅を建設するためにである。
慎三は新婚の間は家族と同居したくなさそうであったが、彼の妻の夏美は、義父はもとより、

先住者であった嫁の私と勢津子ともすぐに仲良くなった。同じ敷地内に三組の夫婦が住むことを何よりもおもしろがっていたのは夏美であり、慎三は妻に押しきられた形で、しぶしぶ同居を承知した。

瀟洒なその住宅は、慎三の結婚式の十日前に完成した。二階建ての白壁にグレイの屋根。窓という窓にはモスグリーンのガラリ戸のアクセントがつけられ、玄関は右端と左端にそれぞれ相似形のように収まっている。二階の窓は屋根裏部屋のようにせり出した小窓で、鉢植えを並べられるように、小さな花台がついていた。

内部は二世帯ともまったく同じ造りで、ごく普通のマンションの3LDKほどの大きさだったが、ライトブラウン系の壁で統一された各部屋は、あくまでもシンプルにまとめられ、住む人間をどこかしら落ち着かせる雰囲気にあふれていた。実際、私も母屋に住むよりは、あの家に住みたいと思ったほどだ。

義父自慢の母屋は建て坪が百三十坪ほどある、馬鹿でかい二階建てのアメリカンスタイルの家だった。ほとんどの窓が信じられないほど大きく、ガラスは天井まで届くほどだったので、遠くから見ると屋根のついた水槽みたいに見える。先代が住んでいたころの家は、小ぶりながらも名邸と呼ばれるほど歴史の古い洋館造りだったようだが、義父は仄暗い洋館造りの家を嫌い、すべて取り壊した。窓からとりいれる光と影のコントラスト以上に贅沢なインテリアはない、というのが義父の持論であり、母屋はまさにその通りに建て替えられたのだ。

むろん窓にはそれぞれ意匠をこらしたカーテンやシェードが下げられていたのだが、光が渦巻く室内は、いつもどこか落ち着かなかった。遥か彼方の高層ビルの窓から望遠鏡を使って覗いても、椅子の下の埃まで見分けられそうなほど明るい室内にいると、おかしなことではあるが、むしょうに闇が恋しくなった。一人で母屋にいる時、私はたいてい、一番薄暗い北向きの家事室で時間を過ごしたものだ。

次男の慎次の妻である勢津子が、母屋の異様なほどの明るさをどう思っていたのかはわからない。だが、彼女は二世帯住宅が完成すると、夫の助けも求めずにさっさと荷物を新居に運びこみ、同棲生活を始める時の若い娘のように、鼻唄まじりに家の中を飾りたてた。広く明るい母屋に住むのは、私たち夫婦と義父だけになった。

しばらくの間、母屋はいささか広々としすぎていて居心地が悪かった。夫の慎一は唐沢商会の外商部に勤めており、夫が朝、義父と連れ立って家を出て行ってしまうと、母屋には私一人だけが残されることになる。広い家は、掃除に手間がかかるとはいえ、時々、通いの家政婦が来ていたので、私がするべきことはあまりなかった。

一人でいることは好きだったが、それでも至近距離に同じ立場の女がいる、と思うと、かえって奇妙な人恋しさにかられたりもした。そうした一時期の人恋しさは私だけではなかったらしい。勢津子や夏美もまた、同じだったようだ。

私たち女三人は、夫を送り出し、家事を一通り済ませてから、決まって声をかけあい、いずれ

かの家に集まるようになった。買物にもたいてい三人一緒に出かけた。
あのころ、勢津子の夫、慎次はまだ音楽雑誌社に勤務しており、夏美の夫、慎三は友人と小学生向けの塾を経営していた。私たち三人の夫の帰宅時間は、それぞれ異なっていたのだが、夫の仕事の忙しさから推し量って、遅い帰宅になりそうな日は三人そろって銀座や六本木に出かけ、のんびり夕食をとったり、ホテルのバーで飲んだりすることもあった。
集まって何をするでもなく、学生時代の延長のようにしてコーヒーを前に世間話をする程度だったのだが、それでも話題は尽きなかった。世間の目には、私たち三人の唐沢家の嫁は絵に描いたようにうまくいっていると映っただろう。実際、私たちはうまくやっていた。思い返してみても、互いに不愉快な思いをしたことなど一度もなかったと言っていい。
義父が再婚の意志を打ち明けたのは、夏美が嫁いで来た二年後のことになる。相手は寿美江という名の、和服が似合いすぎるほど似合う、玄人(くろうと)じみた感じのする中年女性だった。
義父は育代に死なれてから、あちこちで愛人を作り、気ままに遊んでいたようだったが、決して女性と遊ぶことだけに快感を覚えるタイプの人間ではなかった。連れ合いをなくし、義父は寂しかったのだと思う。その証拠に、寿美江と再婚してからは、義父の女遊びはぱったりとなくなった。
寿美江には連れ子がいた。当時十八歳だったその娘は、有沙(ありさ)という名前の、どこか世をすねた感じのする美少女だった。

初めて有沙を紹介された時の、あのなんとも形容のしがたい驚きは忘れられない。つややかな髪の毛をセシルカットにし、ジーンズにトレーナーというボーイッシュないでたちで現れた有沙は、ひどく痩せており、決して女らしい身体つきはしていなかったが、それでも匂いたつような性的魅力にあふれた少女だった。大きな目と肉感的な唇、それとは対照的に細く儚げな感じのする鼻……何もかもがアンバランスであり、居合わせた者を落ち着かなくさせる魅力は、危うさと神秘性にあふれていて、私など、どう接したらいいのか、わからなかったほどだ。

唐沢家の母屋には、私と夫、義父と寿美江、有沙……の五人が暮らすことになった。母屋はいっぺんに賑やかになった。

寿美江は利口な人で、三人の息子はむろんのこと、私たち三人の嫁ともまもなくうちとけ、あたりさわりなく穏やかな関係を作ることに成功したが、有沙はなかなか私たちと親しくなれなかった。

とはいっても、私たち三人の嫁が若く美しい有沙にやきもちを焼いて意地悪をした、ということは決してない。誓って言うが、私も勢津子も夏美も、そうした意味では大人だった。有沙は確かに美しく、同性すらもはっとさせる魅力にあふれていた娘だったが、だからといって私たちが意地悪をしなければならない理由は何ひとつなかった。私たちは全員、親しみをもって有沙と接し、彼女を受け入れようとしていたのだ。

有沙が私たちと親しくなれなかったのは、ひとえに彼女の性格によるものだったと思う。彼女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.